２０２５年度　秋学期
学生による授業評価と授業改善のためのアンケート

結　果
（全体集計抜粋版）

こども教育宝仙大学　FD 委員会

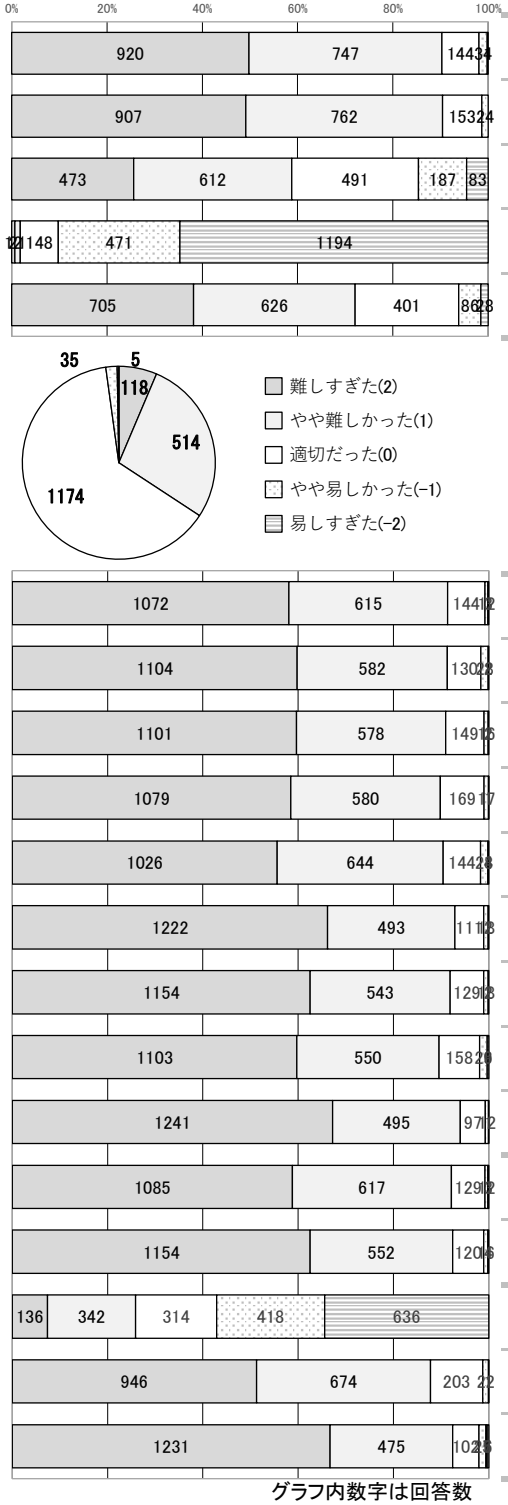
１．全体集計

学生による授業評価と授業改善のためのアンケート　　こども教育宝仙大学

2025年度秋学期

全体集計	履修者数	2217	回答者数	1846	回答率	83.3%

区分	質問番号	質問内容	得点
学生の取り組み	1	学生全体の授業態度はよかった。	4.38
	2	あなた自身の授業態度はよかった。	4.38
	3	予習、復習を行った。	3.65
	3a	1回の授業のために予習と復習に費やした平均時間	0.53
	4	わからないところは積極的に質問するように心がけた。	4.03
授業の内容、方法、教員の取り組み	5	授業の難易度は適切だった。 選択肢右の括弧内数値は配点。 不明(無回答を含む)回答は除く。	0.38
	6	シラバスに沿った内容、方法で授業が行われた。	4.48
	7	授業はよく準備・工夫されていた。	4.49
	8	授業(テキスト、配布資料など)の活用は適切だった。	4.50
	9	黒板／ホワイトボードや視聴覚教材の使用は、効果的だった。	4.47
	10	学生の理解度、習熟度を考慮して授業が進められていた。	4.44
	11	教員の話し声は聞き取りやすかった。	4.58
	12	教員は、学生の質問や疑問、意見に適切に対応した。	4.53
	13	教員は、私語などを注意し、授業環境を適正に保つ配慮をした。	4.47
	14	教員の取り組む姿勢に熱意、誠実さ、真剣さを感じた。	4.61
全体的な評価	15	この授業に関連する内容への関心が深まった。	4.50
	16	この授業を受けて満足している。	4.54
授業状況に関する質問	19	この授業であなた自身の集中を妨げるようなことが、よくあった。	2.42
	20	この授業の教材(テキスト、配布資料など)は、あなた自身にとって理解しやすかった。	4.38
	21	この授業で他の履修者(学生)と協力しあえた。	4.58



グラフ内数字は回答数

グラフ凡例(質問5を除く)

選択肢	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	不明(含無回答)	(注)
配点	5	4	3	2	1	ー	ー
選択肢3a	4時間以上	2時間から4時間未満	1時間から2時間未満	30分から1時間未満	30分未満		
配点	4	3	1.5	0.75	0.25	ー	ー

得点の計算について
各回答選択肢の配点の総和を回答総数で割ったもの。但し、不明回答については計算から除外。

注: 質問番号21の選択肢「この授業でグループワークや助け合う状況はなかった」

注:履修者数はアンケート実施科目の延べ人数

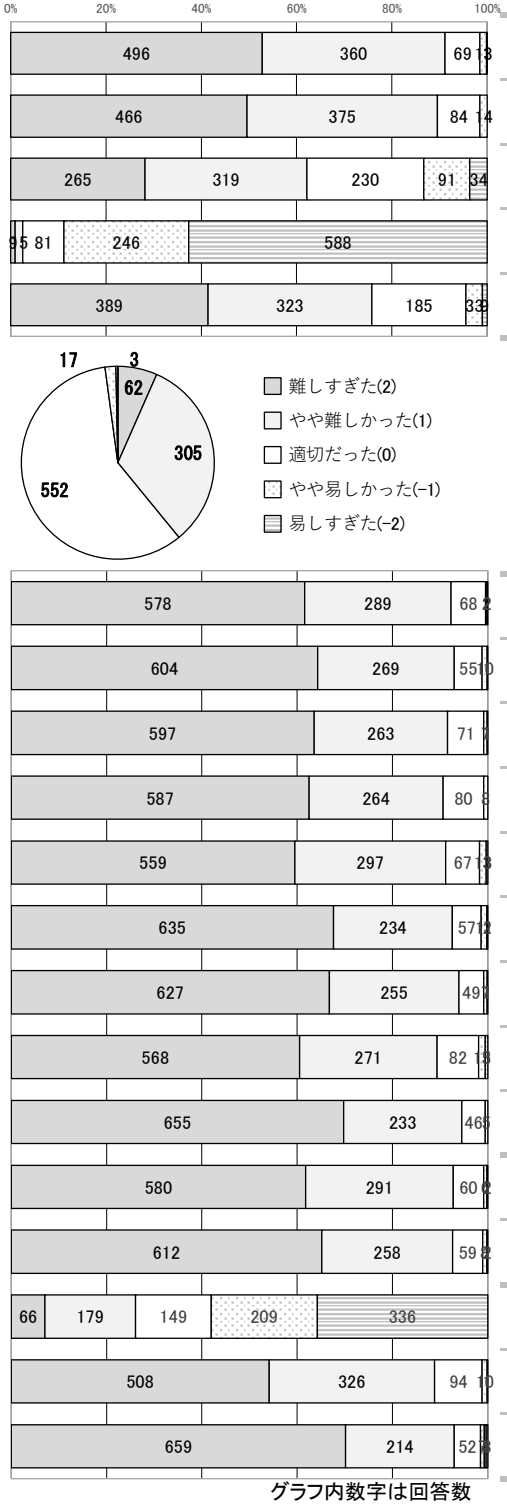
学生による授業評価と授業改善のためのアンケート　　こども教育宝仙大学

授業種別集計

2025年度秋学期

演習	履修者数	1129	回答者数	939	回答率	83.2%

区分	質問番号	質問内容	得点
学生の取り組み	1	学生全体の授業態度はよかった。	4.42
	2	あなた自身の授業態度はよかった。	4.38
	3	予習、復習を行った。	3.73
	3a	1回の授業のために予習と復習に費やした平均時間	0.57
	4	わからないところは積極的に質問するように心がけた。	4.12
授業の内容、方法、教員の取り組み	5	授業の難易度は適切だった。 選択肢右の括弧内数値は配点。 不明(無回答を含む)回答は除く。	0.43
	6	シラバスに沿った内容、方法で授業が行われた。	4.53
	7	授業はよく準備・工夫されていた。	4.56
	8	授業(テキスト、配布資料など)の活用は適切だった。	4.54
	9	黒板／ホワイトボードや視聴覚教材の使用は、効果的だった。	4.52
	10	学生の理解度、習熟度を考慮して授業が進められていた。	4.49
	11	教員の話し声は聞き取りやすかった。	4.59
	12	教員は、学生の質問や疑問、意見に適切に対応した。	4.60
	13	教員は、私語などを注意し、授業環境を適正に保つ配慮をした。	4.47
	14	教員の取り組む姿勢に熱意、誠実さ、真剣さを感じた。	4.64
全体的な評価	15	この授業に関連する内容への関心が深まった。	4.53
	16	この授業を受けて満足している。	4.57
授業状況に関する質問	19	この授業であなた自身の集中を妨げるようなことが、よくあった。	2.39
	20	この授業の教材(テキスト、配布資料など)は、あなた自身にとって理解しやすかった。	4.42
	21	この授業で他の履修者(学生)と協力しあえた。	4.62



グラフ内数字は回答数

グラフ凡例(質問5を除く)

選択肢	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	不明(含無回答)	(注)
配点	5	4	3	2	1	ー	ー
選択肢3a	4時間以上	2時間から4時間未満	1時間から2時間未満	30分から1時間未満	30分未満		
配点	4	3	1.5	0.75	0.25	ー	ー

得点の計算について
各回答選択肢の配点の総和を回答総数で割ったもの。但し、不明回答については計算から除外。

注: 質問番号21の選択肢「この授業でグループワークや助け合う状況はなかった」

注:履修者数はアンケート実施科目の延べ人数

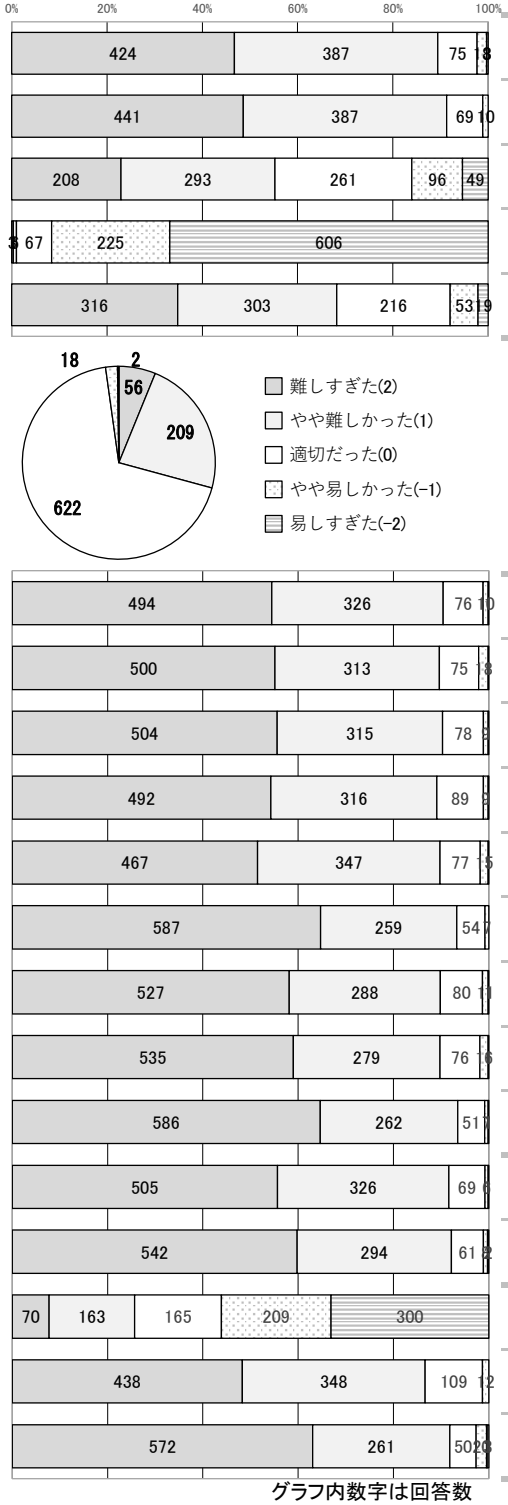
学生による授業評価と授業改善のためのアンケート　　こども教育宝仙大学

授業種別集計

2025年度秋学期

講義	履修者数	1088	回答者数	907	回答率	83.4%

区分	質問番号	質問内容	得点
学生の取り組み	1	学生全体の授業態度はよかった。	4.34
	2	あなた自身の授業態度はよかった。	4.39
	3	予習、復習を行った。	3.57
	3a	1回の授業のために予習と復習に費やした平均時間	0.50
	4	わからないところは積極的に質問するように心がけた。	3.93
授業の内容、方法、教員の取り組み	5	授業の難易度は適切だった。 選択肢右の括弧内数値は配点。 不明(無回答を含む)回答は除く。	0.33
	6	シラバスに沿った内容、方法で授業が行われた。	4.44
	7	授業はよく準備・工夫されていた。	4.43
	8	授業(テキスト、配布資料など)の活用は適切だった。	4.45
	9	黒板／ホワイトボードや視聴覚教材の使用は、効果的だった。	4.42
	10	学生の理解度、習熟度を考慮して授業が進められていた。	4.39
	11	教員の話し声は聞き取りやすかった。	4.57
	12	教員は、学生の質問や疑問、意見に適切に対応した。	4.47
	13	教員は、私語などを注意し、授業環境を適正に保つ配慮をした。	4.47
	14	教員の取り組む姿勢に熱意、誠実さ、真剣さを感じた。	4.57
全体的な評価	15	この授業に関連する内容への関心が深まった。	4.46
	16	この授業を受けて満足している。	4.51
授業状況に関する質問	19	この授業であなた自身の集中を妨げるようなことが、よくあった。	2.44
	20	この授業の教材(テキスト、配布資料など)は、あなた自身にとって理解しやすかった。	4.34
	21	この授業で他の履修者(学生)と協力しあえた。	4.53



グラフ内数字は回答数

グラフ凡例(質問 5 を除く)

選択肢	強くそう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全くそう思わない	不明(含無回答)	(注)
配点	5	4	3	2	1	ー	ー
選択肢 3a	4時間以上	2時間から4時間未満	1時間から2時間未満	30分から1時間未満	30分未満		
配点	4	3	1.5	0.75	0.25	ー	ー

得点の計算について
各回答選択肢の配点の総和を回答総数で割ったもの。但し、不明回答については計算から除外。

注: 質問番号 21 の選択肢「この授業でグループワークや助け合う状況はなかった」

注:履修者数はアンケート実施科目の延べ人数

秋期期全体集計について

１　概況および回答率

１－１　概況と集計対象期間の設定

本報告書における集計は，2025 年度秋学期に実施された FD 授業アンケートの全体結果に基づいている。科目構成や学生の学業への習熟度など，学期ごとの状況は異なるが，本報告書では，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受ける以前の 2019 年度までの状況に加え，初めて影響を受けた 2020 年度春学期以降の状況との比較を重視する。これは，各教員が対面・遠隔を問わずに行った授業改善の取り組みや，全学的な授業改善の成果として 2025 年度秋学期の授業状況があるという考えに基づいているためである。比較対象期間として，2020 年度春学期から前学期の 2025 年度春学期までを設定し，必要に応じて 2019 年度のデータを参照した。

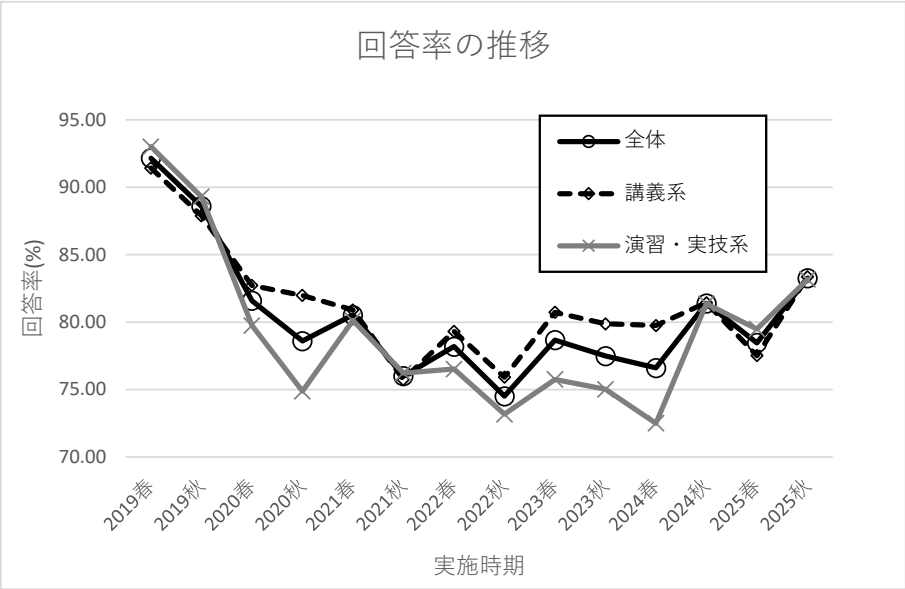
なお，調査対象科目については，学期によって実技系科目が含まれない場合があるため，他の学期との継続性を考慮し，講義に加え，演習系科目を「演習・実技系」と表記し，集計した。ただし，一部の図表などでは「演習」と簡略化している。科目数の計上においては，班分けを行った科目は全体で 1 科目としたが，習熟度別クラスとしたものは別科目として取り扱った。

１－２　回答率について

2025 年度秋学期の回答率は 83.27%（アンケート実施科目の延べ履修者数 2,217 人に対し，延べ回答者数 1,846 人）であった。これは，2024 年度秋学期の回答率 81.40%から 1.87 ポイント増加した。

しかし，コロナ禍前の 2019 年度同学期の回答率 88.60%と比較すると，5.34 ポイントの低下であり，回復には至っていない。初めてオンラインでアンケートを実施した 2020 年度春学期の回答率 81.59%と比較すると，ようやく上回ることができた。今後ともこの傾向が維持できるように留意したい。今回は，回答率が特に低い一部の科目に対し働きかけを行ったが，委員による判断に基づいたものであり，もっと早期に対応ができた可能性がある。高い回収率を確保するためには，実施手順の徹底と，学生の回答を促す環境の工夫が求められる。具体的には，担当教員が担当科目の実際の回答率を参照できるようにするなど，回答率改善に向けた一層の取り組みが必要である。また，教員からの働きかけとは別に，委員会からも学生への回答奨励を行う必要がある。

授業種別ごとの回答率では，講義系が 83.36%，演習・実技系が 83.17%であった。2024 年度秋学期との増減を比較すると，講義系では 1.93 ポイント，演習・実技系では 1.81 ポイントの増加であった。来年度春学期においても，引き続き，実施期間中の回答率の確認に留意したい。

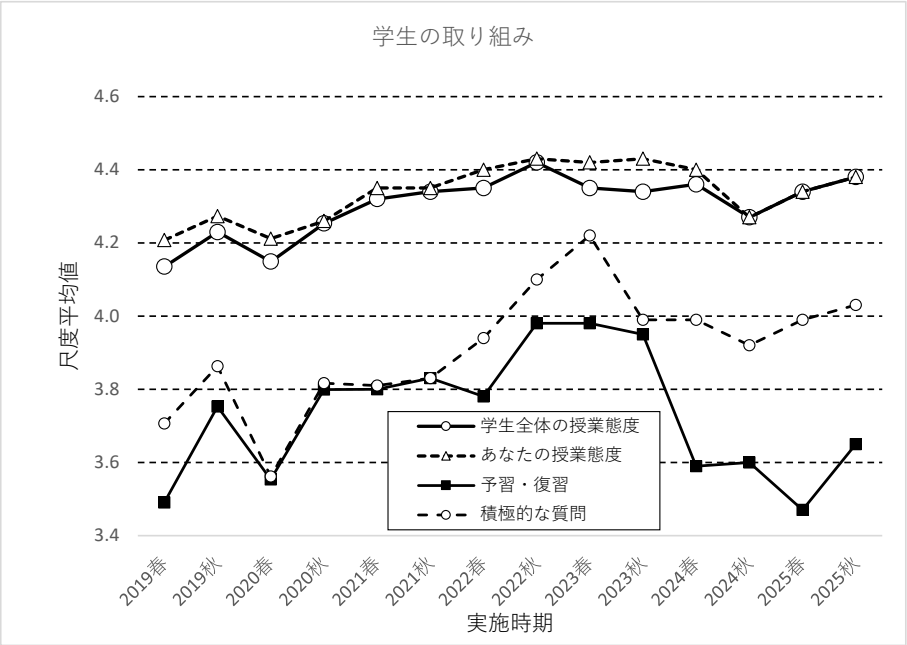


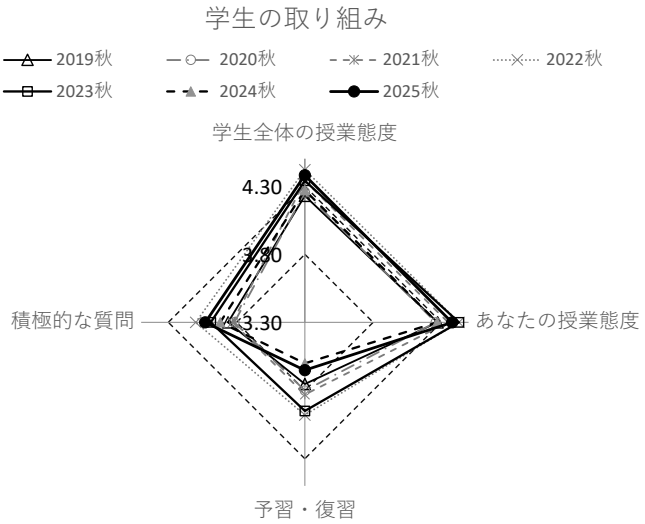
２　全体集計結果

２－１　学生の取り組み

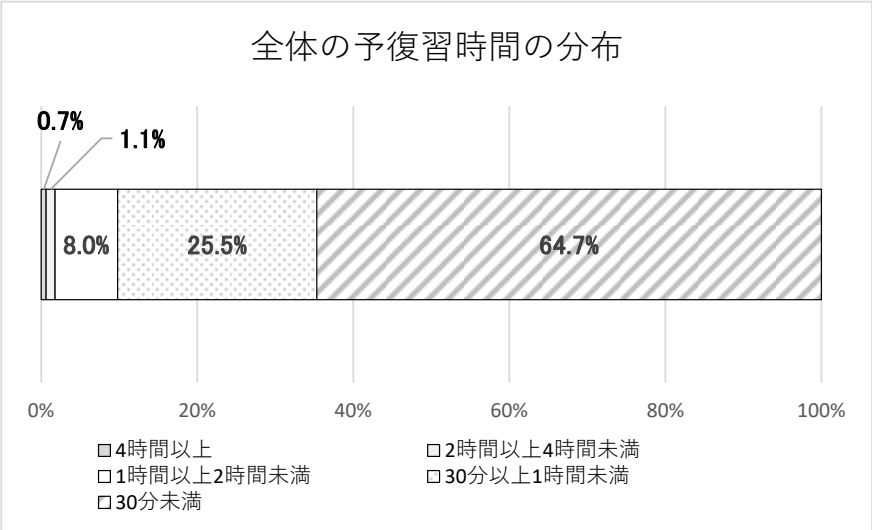
本アンケートは基本的に 5 件法で実施され，「強くそう思う」-「全くそう思わない」を順に 5 から 1 点の重み付けをして集計した。秋学期の学生の取り組みの傾向については 2019 年度から 2022 年度までは上昇傾向にあり，全体的に高い値を示していたが，2023 から 2024 年にかけて減少した。しかし，今学期は全体的に増加した。

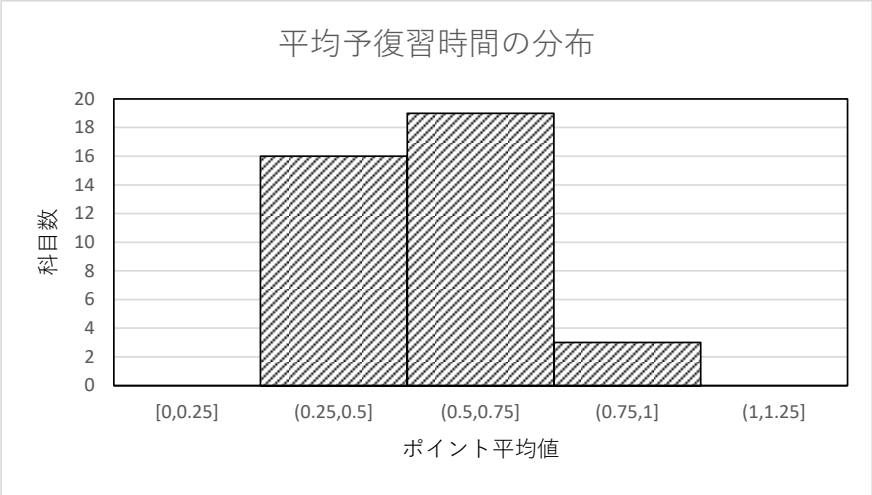
質問項目の平均値は，質問 1「学生全体の授業態度はよかった。」が 4.38，質問 2「あなた自身の授業態度はよかった。」が 4.38，質問 3「予習・復習を行った。」が 3.65，質問 4「わからないところは積極的に質問するように心がけた。」が 4.03 であった。2024 年度秋学期と比較すると，すべて平均値が上昇している。予復習時間を問う設問を追加する前の 2022 年度秋学期との比較では，質問 2 と質問 3 の回答の差は 0.45 ポイントであったが，2023 年度秋学期が 0.48 ポイント，2024 年度秋学期が 0.67 ポイント，2025 年度秋学期が 0.73 ポイントへと拡大している。予復習時間に関する設問が加わったことで，質問 3 の回答が減少傾向にある一方で，今学期は幾分回復したが，質問 2 との乖離が拡大しており，予習・復習が授業の一環であるという意識づけが，さらに必要であると考えられる。





予復習時間に関する自己評価では，半数以上，64.7%の回答で 30 分未満という自己評価であった。予復習時間ごとのポイント換算（4 時間以上:4，2 時間以上 4 時間未満:3，1 時間以上 2 時間未満:1.5，30 分以上 1 時間未満:0.75，30 分未満:0.25）を用いて科目ごとの平均値を算出したところ，アンケート対象科目の 92%が 0.75 以下となり，回答全体の平均は 0.53 であった。これは 2024 年度秋学期の 0.58，2023 年度秋学期の 0.55 よりも低い。学期末に全 15 回の授業の平均を振り返って自己評価するという設問の性質や，多くの予復習時間を必要とするゼミ授業や実習関連科目がアンケート対象に含まれていないことを考慮しても，学生が予復習に取り組めるような適切な課題設定が求められる。

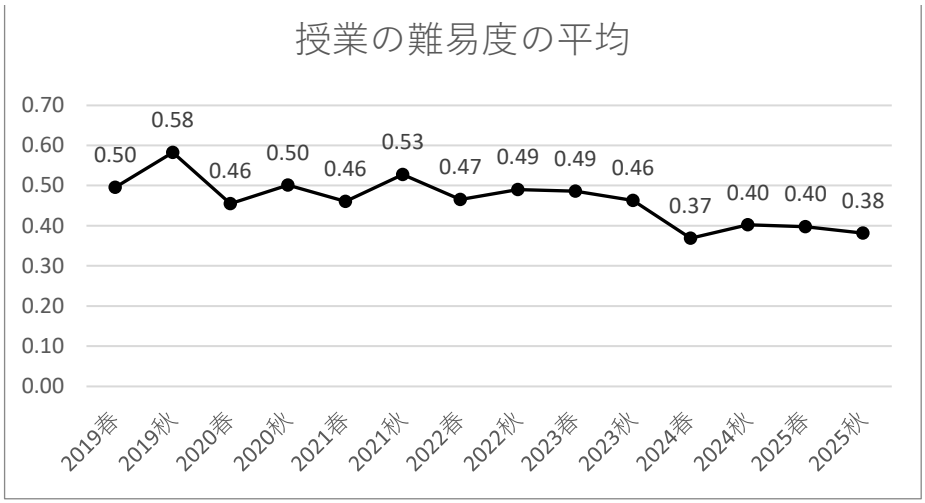


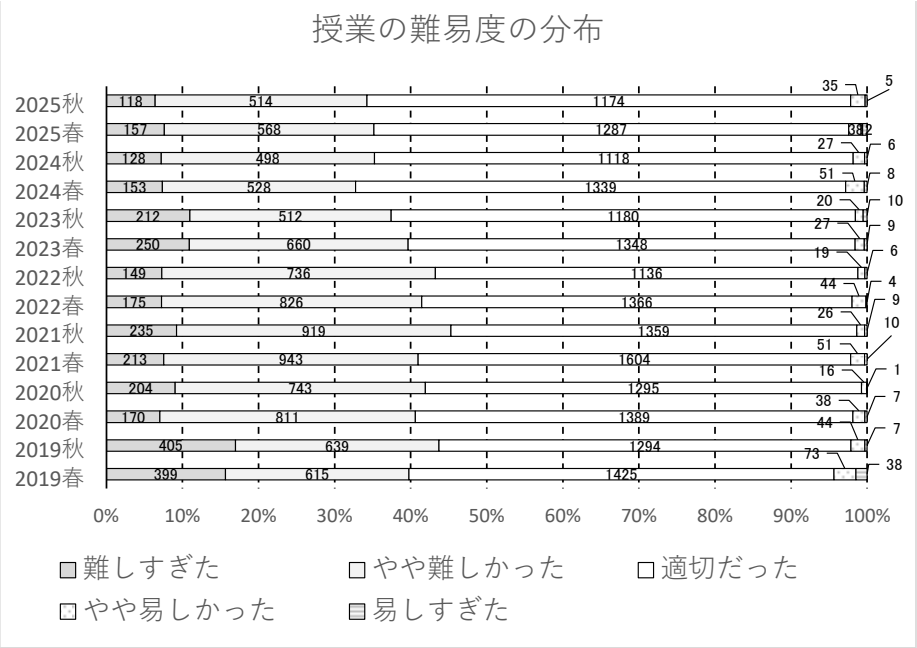


２－２　授業の内容，方法，教員の取り組み

（１）　　難易度について

質問５「授業の難易度は適切だった」の回答平均値（適切を０とした-2～2のスケールで集計）は 0.38 であり，0 に近いことから，2024 年度秋学期平均値（0.40）に引き続き，全体としては概ね難易度が適切な科目が多かったと判断できる。「難しすぎた」,「やや難しかった」の割合が 6.4%, 27.8%であり前年度秋学期から「難しすぎた」「やや難しかった」は微減した(2025 年春 7.6%,27.5%, 2024 年度秋 7.2%,28.0%, 春 7.4%,25.4%)。2020 年度以降,「難しすぎた」は低い水準にあり，難易度に配慮しながら授業を行っていることが窺える。しかし，この結果は質問 16「この授業を受けて満足している」の結果と関連づけて見る必要があり，34.2%の学生が難易度は高いと感じていることに配慮しなければならない。

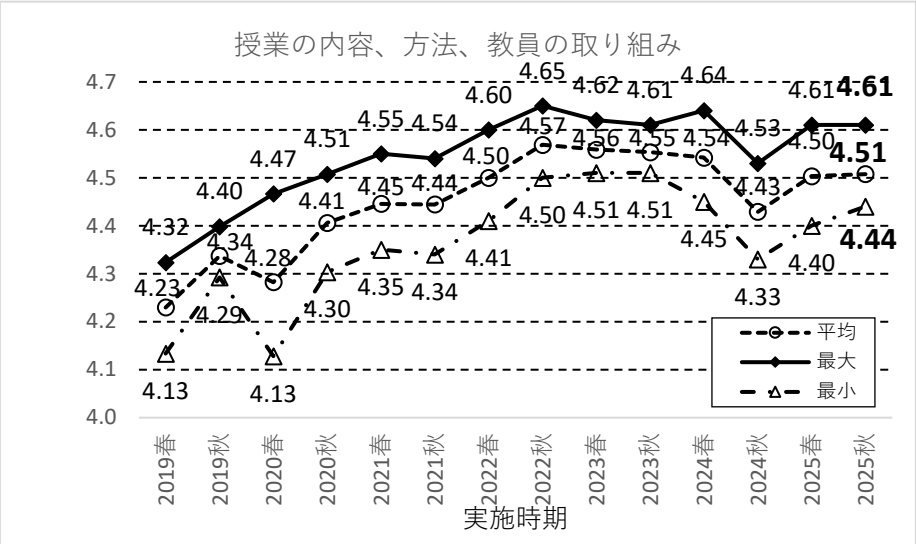


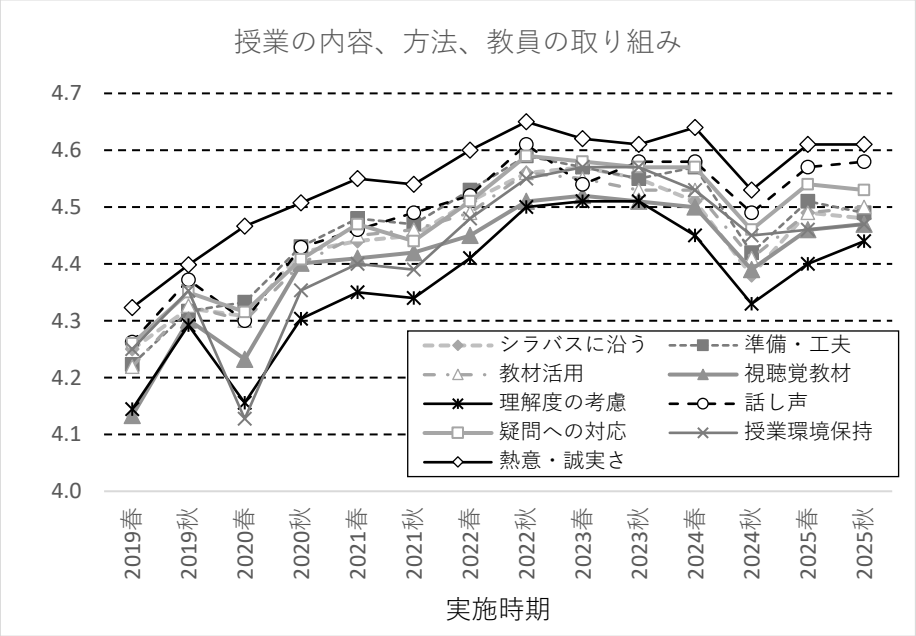


（２）　　授業への取り組み

本区分の今年度秋学期の質問 6 から 14 の授業の内容，方法，教員の取り組みについての項目を平均した値は 4.51，レンジ 4.61～4.44 であり全て 4.0 以上で高い評価を得た。最も高得点(4.61)であったのは昨年度同様，質問 14「教員の取り組む姿勢に誠意，誠実さ，真剣さを感じた。」であり，次に高得点(4.58)であったのは質問 11「教員の話し声は聞き取りやすかった」(グラフ凡例：「話し声」)であり，以下の様に続く，質問 12「教員は，学生の質問や疑問，意見に適切に対応した。」(グラフ凡例：「疑問への対応」)(4.53)，質問 8「授業(テキスト，配布資料など)の活用は適切だった。」(グラフ凡例：「教材活用」)(4.50), 質問 7「授業はよく準備・工夫されていた。」(グラフ凡例：「準備・工夫」)(4.49), 質問 6「シラバスに沿った内容，方法で授業が行われた。」(グラフ凡例：「シラバスに沿う」)(4.48),であった。残り 7,9 位は順に質問 9「黒板・ホワイトボードや視聴覚教材の使用は，効果的だった。」(グラフ凡例：「視聴覚教材」)(4.47), 質問 13「教員は，私語などを注意し，授業環境を適正に保つ配慮をした。」(グラフ凡例：「授業環境保持」)(4.47), 質問 10「学生の理解度，習熟度を考慮して授業が進められていた。」(グラフ凡例：「理解度の考慮」)(4.44)が最下位になっている。

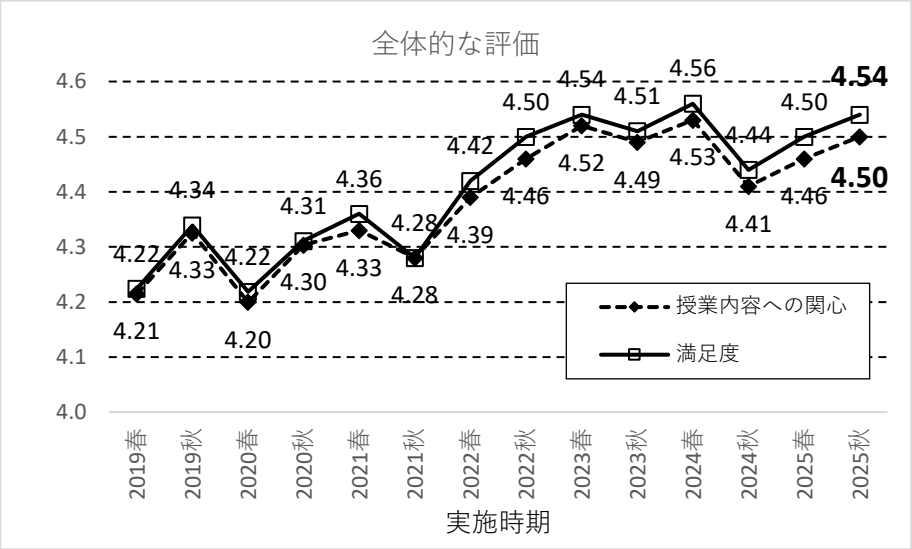
質問 6 から 14 の平均値が 2022 年度秋学期を最高値として，4.57,4.56,4.55,4.54,4.43 と今年度春学期の 4.50 に達するまで低下傾向が続いていたが，今学期（秋学期）は 4.51 と回復傾向が見られる。問 10「理解度の考慮」は 2020 年度秋学期より最下位であったが，値は上昇傾向であった。しかし，2024 年度春学期からは下降に転じ，秋学期も引き続き減少し，2025 年度秋学期は 2024 年度秋学期より改善した。しかし，2025 年度春学期は 2024 年度春学期よりは減少している。この結果から，履修者の状況への一層の注意が必要であると示唆される。





（3）　全体的な評価

質問 15「この授業に関連する内容への関心が深まった。」と質問 16「この授業を受けて満足している。」という全体的な評価については，ピークであった 2024 年度春学期との差がそれぞれ -0.03 ポイント，-0.02 ポイントと減少し，コロナ禍以降の上昇傾向が同学期比較において減少に転じた。これまで積み重ねてきた授業改善を振り返りつつ，現在の学生の状況に合わせた継続的な授業改善が求められる。また，授業内容への関心や満足度だけでなく，学生の状況や成績なども併せて，各科目の状況に応じた対応を見出す必要がある。

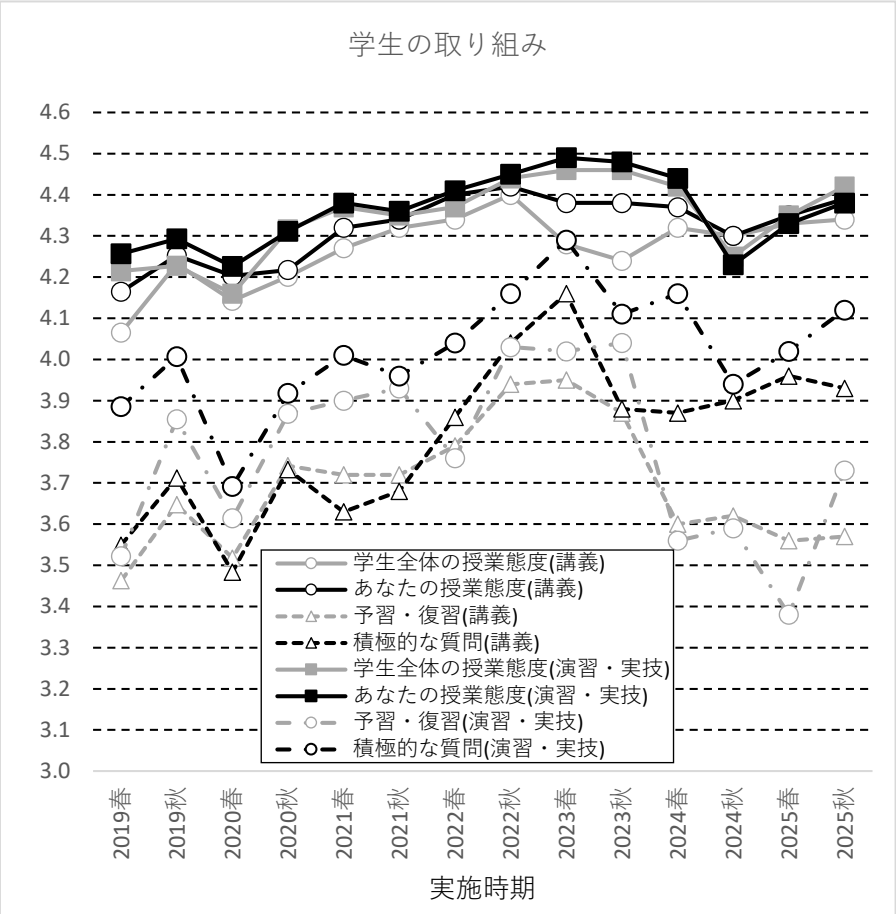


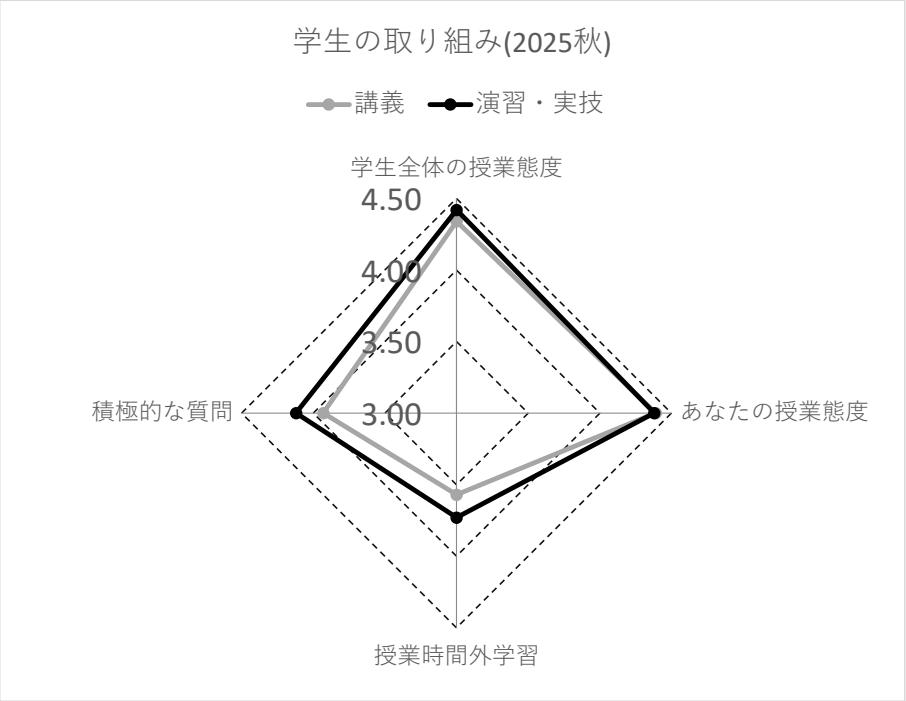
３　講義系科目と演習・実技系科目との比較

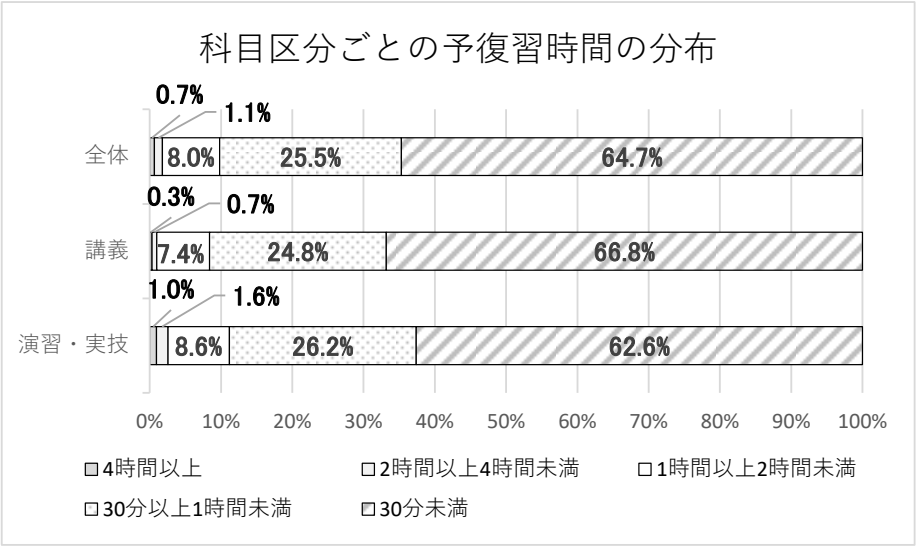
３－１　学生の取り組み

質問 1「学生全体の授業態度はよかった。」は講義系が 4.34 に対し演習・実技系が 4.42，質問 3「予習・復習を行った。」（講義系 3.57 < 演習・実技系 3.73），質問 4「わからないところは積極的に質問するように心がけた。」（講義系 3.39< 演習・実技系 4.12）は演習・実技系が上回った。一方，質問 2「あなた自身の授業態度はよかった。」（講義系 4.39 > 演習・実技系 4.38）は，講義系科目の評価が高い結果となった。

予復習時間のポイント換算平均値は，講義 0.50 < 演習 0.57 と，演習が講義よりも高い結果であった。この傾向は 2024 年度秋学期（講義 0.56 < 演習 0.59）と同様であるが，今回はその差が拡大した。これは，学期末の自己申告回答であることから，学生の印象として，演習系科目において与えられた予復習課題や授業準備の量が，講義系科目よりも多いと感じられた可能性がある。


学生の取り組み
4.6
4.5
4.4
4.3
4.2
4.1
4.0
3.9
3.8
3.7
3.6
3.5
3.4
3.3
3.2
3.1
3.0
学生全体の授業態度(講義)
あなたの授業態度(講義)
予習・復習(講義)
積極的な質問(講義)
学生全体の授業態度(演習・実技)
あなたの授業態度(演習・実技)
予習・復習(演習・実技)
積極的な質問(演習・実技)
2019春
2019秋
2020春
2020秋
2021春
2021秋
2022春
2022秋
2023春
2023秋
2024春
2024秋
2025春
2025秋
実施時期

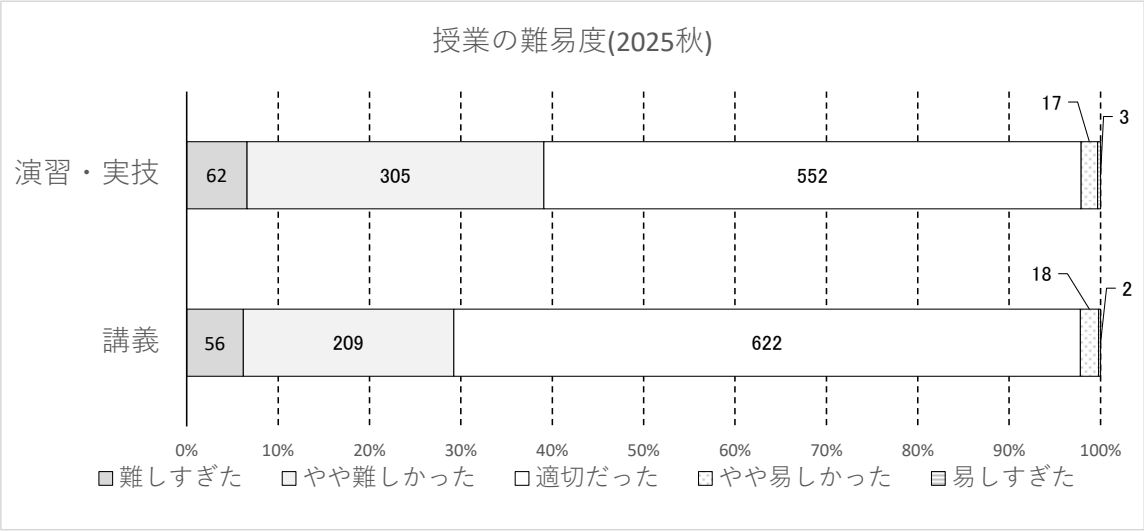

学生の取り組み(2025秋)
講義
演習・実技
学生全体の授業態度
4.50
4.00
3.50
3.00
あなたの授業態度
授業時間外学習
積極的な質問

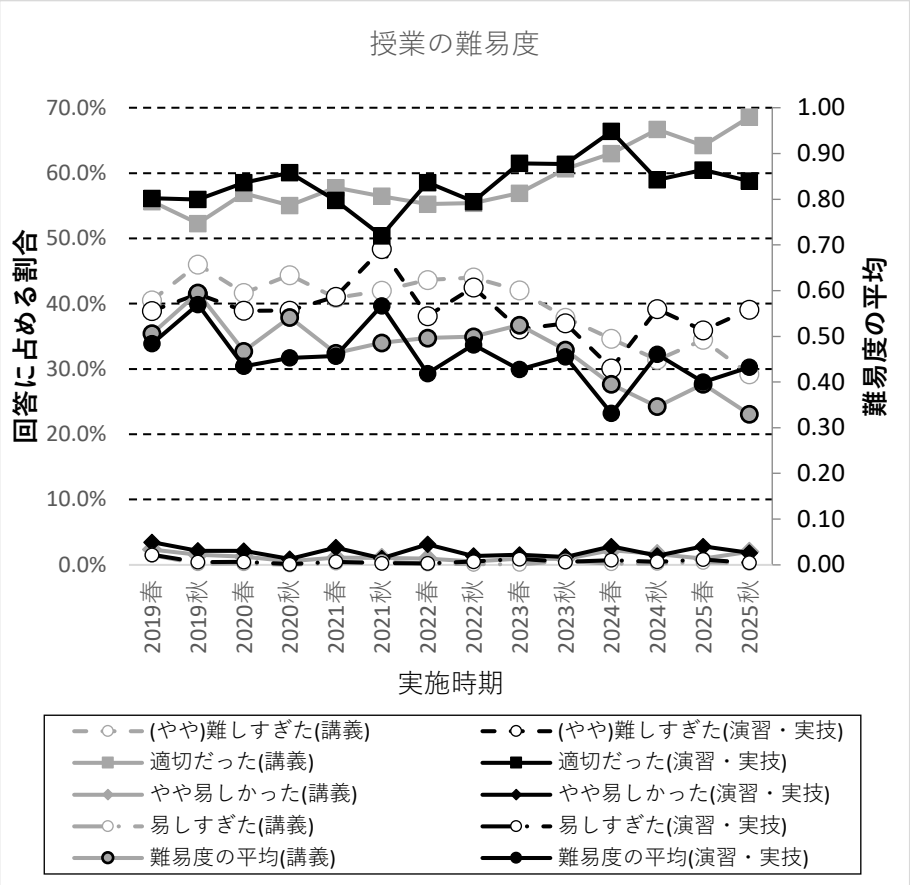


３－２　授業の内容，方法，教員の取り組みについて

（１）　　難易度について

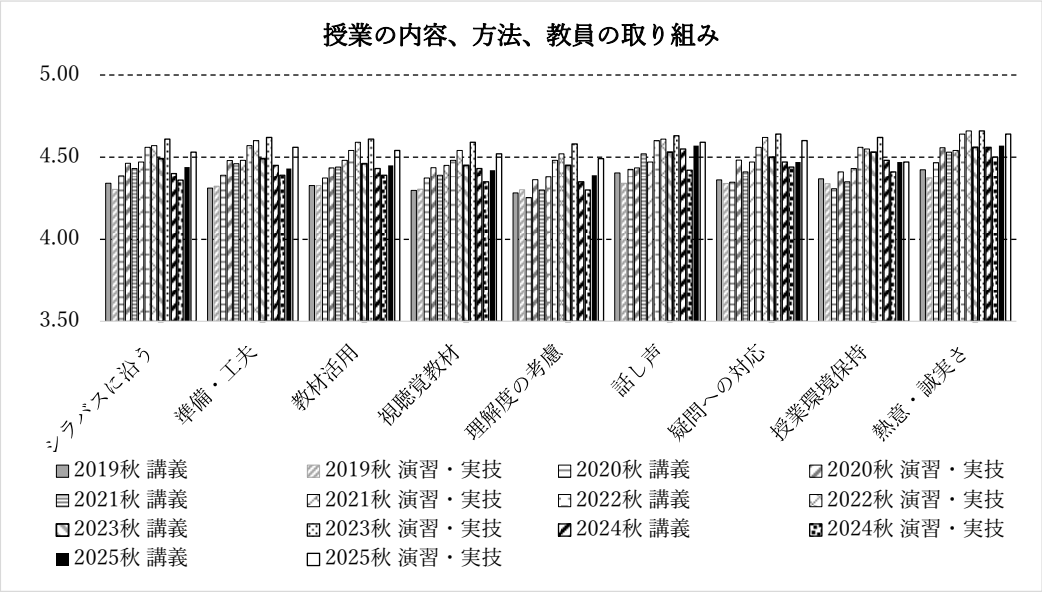
難易度に関して，質問 5 で「適切だった」と回答した割合は，講義系科目で 68.6%，演習・実技系科目で 58.8%と，2024 年度秋学期（66.7%，59.0%）と同じく，講義系が高くなった。「難しすぎた」と「やや難しかった」の合計割合は，講義系が 29.2%，演習・実技系が 39.1%で，演習・実技系が講義系を上回った（2024 年度秋学期は講義系 31.4%，演習・実技系 39.2%）。





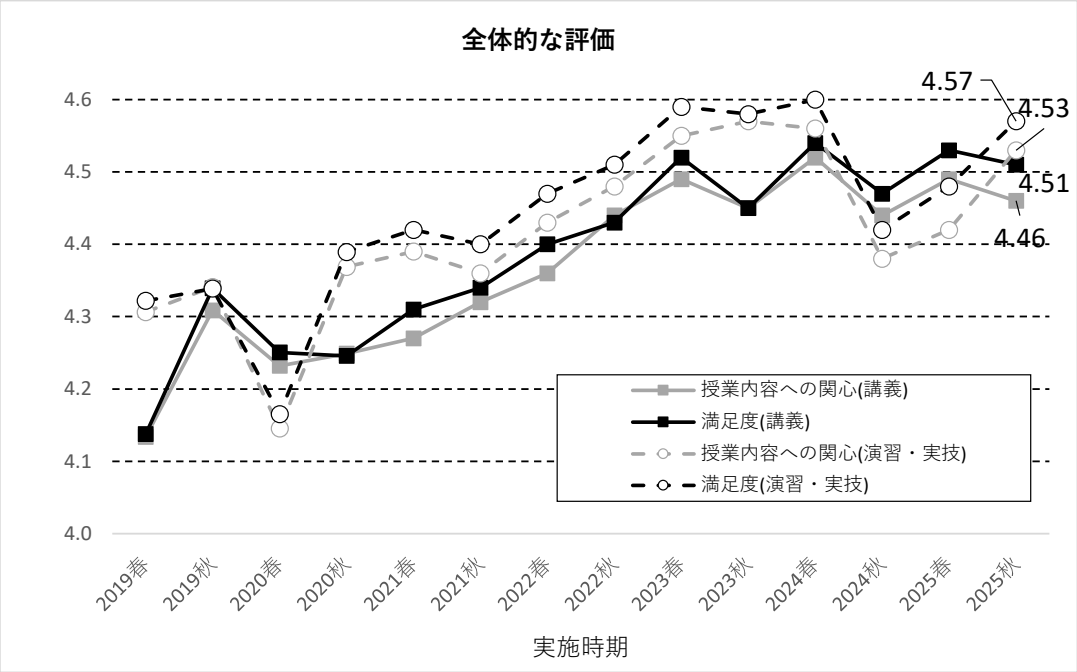
（2）　授業への取り組み

質問 6 から 14 の授業への取り組みに関する平均値は，講義系科目が 4.47（レンジ 4.57～4.39）に対し，演習・実技系科目が 4.55（レンジ 4.47～4.64）と，質問 13「授業環境の保持」がおなじ値であったのを除き，全般的に演習系が上回った。



（３）　全体的な評価

全体的な評価では，質問 15「この授業に関連する内容への関心が深まった。」（講義系 4.46，演習・実技系 4.53），質問 16「この授業を受けて満足している。」（講義系 4.51，演習・実技系 4.57）と，いずれも演習・実技系科目が講義系科目を上回る結果となった。コロナ禍前の 2019 年度春学期は演習・実技系が高い評価を得ていたことを踏まえると，今回の結果はこれまでの傾向と同様の傾向に戻った可能性がある，学生の特性変化を留意しつつこの傾向が続くか注視したい。



４　まとめと今後の課題

2025 年度秋学期は，全面的な対面授業に復帰して 3 年目となり，本学での遠隔授業の本格的な経験がある学生は 4 年生のみとなった。このアンケート結果によれば，調査対象の全回答を平均した結果において，学生の取り組み，授業の内容，方法，教員の取り組み，全体的な評価の全ての項目において，授業の難易度の平均値を除き，昨年度秋学期を下回るものはなかった。教員の取り組みに関する質問 6～14 の平均値において，2024 年度秋学期は質問 14 以外は 4.5 を下回ったのに対し，2025 年度秋学期は質問 8，11，12，14 で 4.5 を上回っている。この傾向が続くように，次年度の授業を行う必要がある。特に，2020 年度秋学期以降，質問 10「学生の理解度，習熟度を考慮して授業が進められていた。」が継続して最下位であるため，理解度の確認に一層留意することが重要である。

2024 年度秋学期より導入された予復習時間に関する質問項目については，集計結果の評価に加え，学期末のアンケートで当該科目の平均予復習時間をより正確に把握するための質問内容やアンケート実施方法の検討が必要である。一方で，この項目により，学生自身が質問 3「予習・復習を行った。」に対して，より明確な基準に基づいて向き合うことができたと考えられる。

演習・実技系科目の評価が講義系科目に比べて高い評価を得ることは，他大学などでも同様に見られる。もともと，保育者を志す学生の場合，楽器を演奏したり，身体を動かしたり，制作や

作業などが好きで得意であり，アドミッションポリシーにも「表現系の教科（音楽・美術・体育等）についての基礎的な素養とそのいずれかについての積極的な関心が求められます。」とあるため，このような内容には興味関心を持って積極的に学ぶ姿勢がある。今学期は，質問 5 を除く質問 1 から 16 の質問のうち，講義系が上回った質問 2 や，同点であった質問 13 などを除く各項目で，演習系科目の評価が講義系を上回った。

2024 年度から実施しているアンケート項目「問 19 この授業であなた自身の集中を妨げるようなことが，よくあった。」について，「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計割合は全体で 25.9%（講義系 25.7%，演習・実技系 26.1%）であった。その原因「問 19a (問 19)回答に関連する項目を選択してください[回答をおこなった原因等について選択してください。](複数回答)」の上位 2 項目は「自身の眠気」と「周囲の話し声」であり，その回答者に対する割合は，それぞれ，全体(19.5%, 5.6%)，講義系(17.3%, 7.5%)，演習・実技系(21.6%, 3.8%)で，周囲の話し声などの授業環境のコントロールが重要であるのに加え，演習系であっても講義系同様に学生の授業参加状況の確認が必要になっていることが窺える。

今回のアンケート結果を踏まえると，コロナ禍で積み上げられた経験を基に，授業改善を重ねつつ対面授業への移行は完了し，全般的にコロナ禍前よりも良い授業が実現しているといえる。しかし，学生の状況の変化に伴い，さらなる改善が求められる段階にあると考えられる。中央教育審議会が指摘するように，「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から，教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」[1]とされており，この視点が引き続き重要である。

AI 活用時代を迎える中，教職員は，学生が情報（知識）を批判的に吟味し，課題解決に活用できる学習環境の改善を，学生は，AI を含む様々な情報にアクセスできる環境を最大限に活用し，自律的に学修に取り組むことが求められる。また，各授業を通して学生が修得した知識や技能および態度を学習成果としてきめ細かく評価し，学生にフィードバックを行っていく仕組みづくりが求められている。対面授業では個別に対応できることから，この取り組みが後退することなく，改善が行われているか，確認を続けるプロセスが必要となる。

【参考資料】(1)中央教育審議会(2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申).